

プラトン

紀元前 427—前 347

プラトンはギリシアの都市国家アテナイに生まれましたが、その前半生についてはよく知られていません。詩と音楽を学び、コリントスのイストミア祭では格闘技に出場し、アテナイ軍で兵役を務めたと言われます。名門一族に生まれ、古代ギリシアでは政治家になる運命だったであろうと思われるのですが、結局、哲学者ソクラテスに弟子入りしました。

ソクラテスの遺産

プラトンはその師から多大な影響を受けた。紀元前 399 年のソクラテスの死後、アテナイでの公職をなげうってあちこちを旅して回り、イタリア、エジプト、リビアを訪れた。哲学について著作を始めると、自らが直接語るうとはしなかった。公の場でソクラテスが他者を相手にやりとりした、さまざまな会話を記録して、『対話篇(へん)』と呼ばれるものを書いた。



アカデメイア

紀元前 387 年、アテナイに戻ったプラトンは、天文学や哲学など幅広い学科を学ぶ学園、アカデメイアを創設した。生徒にはアリストテレス、クセノクラテスのほか、プレイウスのアクシオテアら、少数ながら女性もいた。プラトンは甥(おい)のスペウシッポスに学園の後を託し、アカデメイアはその後 900 年余り存続した。

完全なかたちの世界

プラトン哲学の中心的な観念のひとつに、イデア界がある。イデアとは、不完全な世界で私たちが直接経験する事物の、完全にして不滅のかたちのことだ。プラトンはこの概念を、「鎖につながれて洞窟の壁に顔を向け、太陽を背にしている人間たち」のたとえ話で説明した。真理を表す太陽に背を向け、真理の影しか見ていない人間たちは、それを現実のかたちだと思い込むというのだ。



失われた都市アトランティスの伝説が初めて現れたのは、プラトンの著した『ティマイオス』と『クリティアス』という2つの対話篇の中だった。

「公共の事柄への無関心のために
善良な人間が支払う**代償**は、
**悪い人間たちに
統治**されることだ」

国家

西洋哲学に大きな影響を及ぼしたプラトンは、30 を超える対話篇を著している。紀元前 380 年頃に書かれた『国家』は、プラトンの代表作のひとつ。正義の本性、個々の人間はいかにして徳をそなえることができるか、理想の国家とはどのようなものか、といったことが考察されている。プラトンはまた、高潔な人生が幸福な人生につながることも主張した。

